Plan International

PLAN INTERNATIONAL

Until we are all equal



彼女たちが描く、新しい世界

未来を変える15の物語

「この物語を、どうか読んでください。そして、私たちの声に心を傾け、私たちが描く未来を、ありありと想像してほしいのです。変化は、未来の話ではありません。“今”この瞬間から始まるものです。もし、誰もがチャンスを手にし、平等に生きられる、そんな希望に満ちた未来を望むのなら、今行動を起こさなければなりません。政治家たちには、法律をつくり、政策を進め、社会を動かす力があります。私たちにできるのは、信じること。この小さな行動の積み重ねが、必ずや望んだ未来を現実に変えると、私は心から信じています。」

- Ángela*、18歳、ペルー

目次

未来を読み解く報告書

ようこそ、2055年へ 4

過去を見つめ、未来を拓く 6

女の子が見たい2055年 8

未来からやってきた女の子とユース女性 11

未来から私たちが学べること 12

2025年へ戻って 14

15の物語

変革をコードに乗せて - *Adiatu (20歳、ガーナ)* 16

夢が現実になる日 - *Thialal (20歳、セネガル)* 18

成長を紡ぐ糸 - *Jhussahara (20歳、ペルー)* 20

二度と繰り返さないために - *Kadiata (23歳、ギニア)* 22

砂漠を旅する学校 - *Anguach (24歳、エチオピア)* 24

真珠が伝える知恵 - *Joselyne (25歳、ルワンダ)* 26

一編の詩が世界を変える - *G.T. Alia (21歳、トーゴ)* 28

すべての人のための学校 - *Cristina* (23歳、東ティモール)* 30

彼女たちの紛争ではなかった - *Nickolle (18歳、コロンビア)* 32

Nkabom(団結) - ユース女性のリーダーシップへ - *Barikisu (21歳、ガーナ)* 34

追い風を受けて - *B.* (22歳、ヨルダン)* 36

光が差し込む場所で - *Reem (20歳、エチオピア)* 38

一人たりとも見捨てない - *Ángela* (18歳、ペルー)* 40

マダム・プレジデント - *Tenneh (23歳、シエラレオネ)* 42

私の医療センター - *G.T. Brielle* (18歳、トーゴ)* 44

ようこそ、2055年へ

はじめに

「彼女たちが描く、新しい世界」は、2055年の望ましい世界を舞台にした、希望に満ちた短編集である。プラン・インターナショナルは、「北京+30」の機会に、世界11カ国・15人の思春期の女の子とユース女性を招待し、彼らによるが各国政府や政策立案者が全面的に採用した場合の、30年後の未来を想像してみた。すべての提言が受け入れられ、実現した未来では、思春期の女の子の生活はどうなっているのだろうか?彼女たちが現在実現できていない可能性にアクセスできるようになっているのだろうか?また、新たな、あるいは持続的な課題にどのように直面することになるのだろうか?

物語はユートピアを描いたものではない。事実、そのいくつかは、私たちの最善の努力を以てしても、30年後も彼女たちが直面するであろう闘いを、かなり現実的に描写している。だが、全ての物語が、人びとがユース女性や女の子の夢を実現することに尽力すれば、世界はどうなるかという希望と発想の光を見出すことができる。人々の未来へのビジョンが、変革のための運動を先導することを可能にするのだ。

次のページ以降では

- 作者の物語の流れを知る
- 彼女たちの登場人物・構成・創造した世界に関して共通する要素について理解を深める
- ジェンダー平等の未来にとって何を意味するのか、いくつかの洞察を得る。

2055年へようこそ!

「変化を提唱するのであれば、未来の女の子が望む世界を想像しなければいけません」。

- Joselyne、25歳、ルワンダ

*印は、個人情報保護のため仮名であることを示す。

過去を見つめ、未来を拓く

作者たちは、30年前の1995年に、北京宣言と行動綱領の採択以来、女の子と女性にとってプラスの変化とマイナスの変化を特定し、登場人物の背景に反映させた。以下は、女の子とユース女性が、1995年より改善・変化なし・悪化したと考える分野である。

改善点は?

- 初等教育でのジェンダー平等の向上
- 中等・高等教育への就学率の上昇
- 女の子の就学継続のための、法律・戦略・政府の取り組みの改善
- 女の子と女性のエンパワーメントに特化したスペースの増設
- 自由と自律性の向上
- 性と生殖に関する健康と権利(SRHR)に関する知識の深化
- 女の子と女性は、自身の権利について話すことが許されている
- 女の子と女性が意思決定により関与し、より多くの指導的立場を占めている
- 政府における女性の地位向上

1995年から変化がみられない点は?

- 社会規範に深く根付いた性差別と有害な男性性
- セクシュアル・ハラスメント
- ジェンダーに基づく暴力(GBV)と、被害者・サバイバーへの法的救済の欠如
- 早すぎる強制された結婚 (CEFMU)
- 生理の貧困
- キャリアに対するジェンダー・ステレオタイプ
- ジェンダー賃金格差
- 職場のガラスの天井
- 形式主義: 意思決定の場における女性の代表性は、実際の意味のある平等な参加には至っていない



2025年にみられる、悪化した点は?

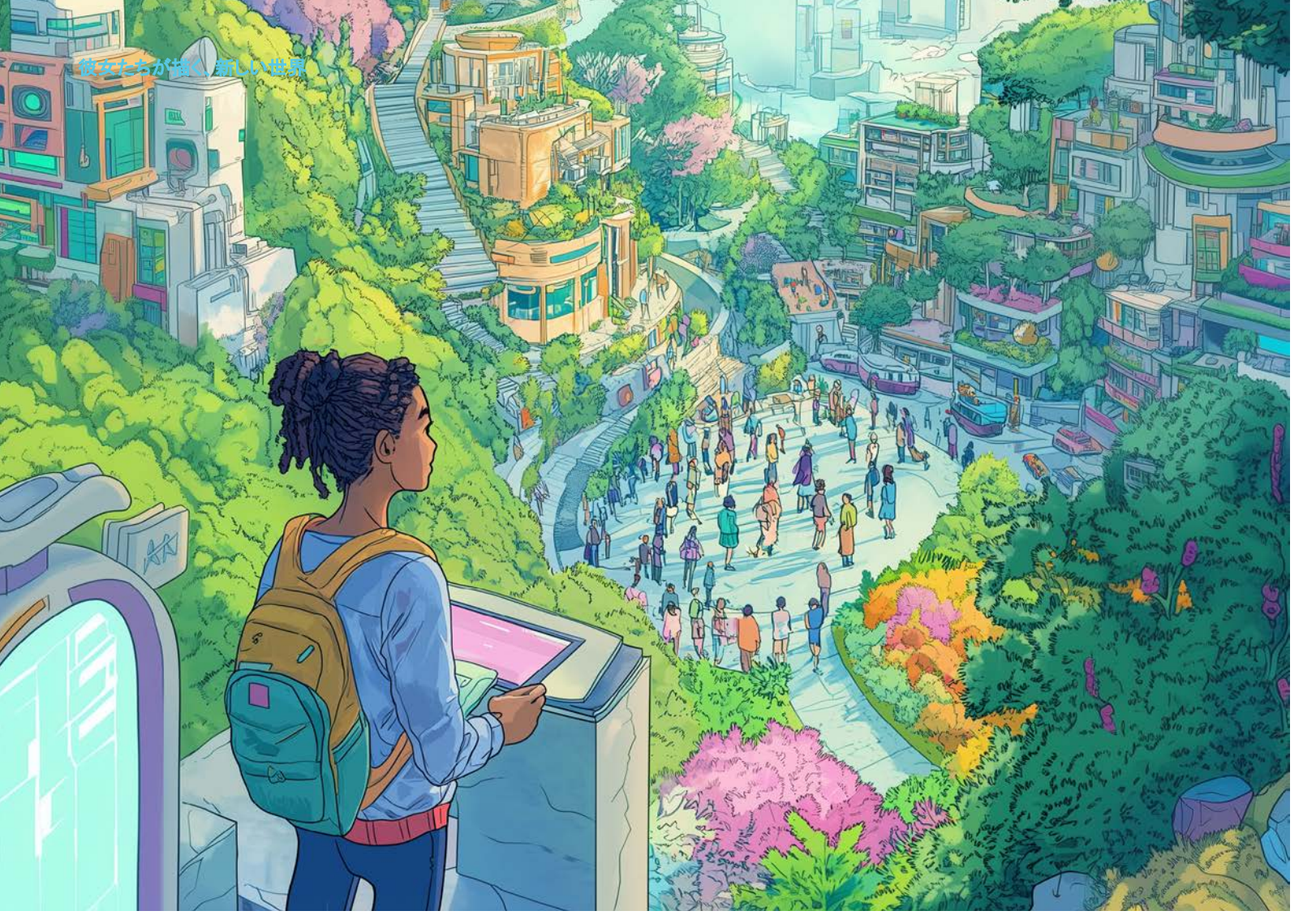
- 反ジェンダー・反フェミニズム運動
- 女の子と女性は紛争や武力衝突の影響を強く受ける
- 女の子が紛争の武器にされている
- 紛争地域における教育の欠如
- 脆弱な集団への気候変動の不均衡な影響
- 性的虐待の増加
- 誤情報
- 女の子と女性へのオンライン暴力の増加(ネットいじめ/オンライン・セクシャルハラスメント/リベンジポルノなど)
- 女の子のメンタルヘルスと自殺率
- 思春期の女の子向けプログラムへの財政支援の縮小

彼女たちはどうそこにたどり着いたのか...

未来設定方法[1]と語りのテクニックを組み合わせ、作者たちにこう呼びかけた。

- 北京行動綱領の採択以来、過去30年間の、女の子と女性の権利の前進と後退を振り返る
- 政府や政策立案者が思春期の女の子とユース女性の提言を実行に移している2055年の未来を思い描く
- その未来に生きる思春期の女の子や女性を主人公にした物語を想像して書く

[1]未来のシナリオを思い描き、望ましい未来を実現する方法を考えるための一連のツール。



女の子が見たい2055年

作者たちの世界観構築の一環として、政策立案者が思春期の女の子とユースの提言を実行したら、世界がどうなるかを話し合った。

教育とテクノロジー

- すべての女の子とユース女性が、全教育段階で無料で質の高い教育を十分に受けることができる
- 学校のカリキュラムはジェンダー・ステレオタイプに影響されずに、ジェンダー平等と包括的性教育(CSE)が含まれている
- 家事やケア労働がジェンダー平等に分担され、女の子が十分な学習時間を確保できる
- 女の子とユース女性は職業を自由に選択でき、STEM分野でも平等に活躍し、等しく賃金を受け取っている
- クリーンで、利用可能な、人間中心で、環境にやさしいテクノロジーが、女の子や女性により、彼女たちのために生み出される
- 障害を持つ子どもとユースが、テクノロジーの進歩により、包摂的教育を享受できるようになる
- テクノロジーは質の高い教育を可能にし、遠隔地の教室と世界をつなぎ、女の子とユース女性のリモートの仕事への就業を促す
- AIは、女の子と女性の権利意識を高める

GBV

- 女の子と女性へのいかなる暴力も社会的に容認されない
- 有害なジェンダー規範や行動は奨励されない
- ジェンダー平等と保護を促進する強力な法律が存在する
- 女の子と女性が恐怖を感じずに、自由に生きることができる
- あらゆる形態のオンライン暴力が防止・規制・処罰され、女の子と女性が安全にテクノロジーを利用できる
- サバイバーは、信用・支援され、心身の健康サービス・避難所・保護・法的救済が提供される
- 加害者は完全に責任を問われる

> **「未来では、性と生殖に基づく暴力（SGBV）はなくなり、被害者への法的救済の徹底が実現するでしょう」。**
>
> - Barikisu、21歳、ガーナ

SRHR

- SRHRは、CSEに対する政府の支援を受けて、学校カリキュラムに含まれている
- SRHRについて、家庭や学校で自由に議論される
- 月経中の女の子が、清潔で安全な設備と無料の月経用品を備えた学校に通う
- 無料の避妊具や安全な妊娠中絶の利用など、質の高いSRHRサービスがすべての女の子と女性に提供され、利用できる
- 女の子と女性は、自身の身体と人生について十分な情報を得た上で選択できる
- CEFMUと女性性器切除(FGM)が世界から根絶されている

> **「(将来は)性と生殖に関する権利が教育の重要な一部とされ、また政府が私たちの敵ではなく味方となり、すべての人の成長にとって非常に重要なCSEが学校で実施されることを保証してくれます」。**
>
> - Ángela*、18歳、ペルー

危機下の女の子(武力衝突と気候変動)

- 誰もが地球と気候変動の影響を最も受ける人びとを守るために活動している
- 女の子と女性は、気候変動の不均衡な影響の予防・軽減・適応に関して全面的な支援を受ける
- 女の子と女性は気候変動対策のリーダーとなり、長期的なプラスの影響と安定を生み出す
- 女性が最も影響を受けるコミュニティのニーズを優先し、紛争解決と平和構築を主導することで、武力衝突が劇的に減少する

女の子のリーダーシップ

- 女の子は幼い頃から指導を受け、あらゆる分野でリーダーシップを発揮・成長させる機会を得ている
- 女の子と女性が、政治を含むあらゆる次元の意思決定に平等かつ有意義に参加している
- 女の子と女性は評価・賞賛され、人びとは彼女たちに投票したいと思う
- 世界中の議会や行政職において、ジェンダー平等が保たれる
- 世界各国で民主主義は強く、活気に満ちている

> **「将来、女性と女の子がSTEM分野・政治・指導的地位で大活躍し、歴史的な障壁や偏見を打ち破ることを願っています」。**
>
> - Adiatu、20歳、ガーナ



未来からやってきた女の子とユース女性

物語を練る前に、作者たちは詳細に登場人物を設定した。15編からなる本作品集では、各登場人物が非常に個性的だ。だが同時に、作者が考える未来の女の子の姿を示すような、似たような特徴を持っている。

- 多様性が全面的に受容される: 主人公たちは様々な特性やアイデンティティを体現している。身体障害を持つ・ニューロダイバーシティーである・先住民・黒人・地方・非定住・LBTQI+の女の子が表現されている。

> **「私が伝えたいメッセージは、アイデンティティに関係なく、誰もが同じ権利を持てるべきだということです。誰もが自身の決断を下す自由を持つべきです。多様性とは、私たち一人ひとりの独自性なのです」。**
>
> - Cristina*、22歳、東ティモール

- 力としての自由: 木登り・冒険・外界の探検・チェス・バスケットボール・サッカー・コーディング・ハイテク技術の開発/利用など、現在ではまだ男の子がするものとされる活動を女の子が追求・楽しむ自由を持つ

- リーダーとしての資質: すべての登場人物は、自信・勇気・信頼性・決断力・思慮深さ・共感・連帯感・好奇心・喜びなど、リーダーシップに関連するスキルを備えている。彼女たちの多くは日記やノートをつけていることは、彼女たちの内省的な性格を象徴している。彼女たちは負わされた過度の責任や期待に苦悩することもあるが、それでも決して直面する困難を恐れない。落胆や自責の念に一瞬襲われたとしても、彼女たちは粘り強く、オン・オフラインのプラットフォームを使って声を上げる。

- 生涯学習者: 女の子は、STEM分野を含め、学校で優秀な成績を収めている。高等教育を受けることは一般的であり、本・芸術・オンラインリソースを活用した学習継続もみられる。

- ライフスタイルとしての提唱活動: 未来から来た女の子たちは、正義・尊重・包摂・平等を重んじ、女の子と女性の権利のために尽力し、意思決定への参加・変化を導くために、自身の声を積極的に活用する。

- 世代間の意識: 主人公のほとんどは、前世代の女性活動家の足跡をたどっており、未来の世代の女の子のために何を成し遂げたいかを、意識的に考えている。

> **「未来の女の子たちは、彼女たちに明るい未来を与えようとする今日のジェンダー活動家の努力を高く評価するでしょう。彼女たちはジェンダーに左右されず活躍の場を占めるようになるでしょう」。**
>
> - Tenneh、23歳、シエラレオネ

- 集団的関与: 多くの登場人物は、コミュニティセンター・技術クラブ・同好会・NPO等の調整役を担い、また、女の子向けのワークショップやプログラムの開発を行う等、他者を団結させる役割を担っている。

- 強みとしてのコミュニティ: 伝統的な服装を重んじ、共に歌い・踊り、食事を分け合い、重要なコミュニティの決定に関与する時間を大切にするという点が示すことから、彼女たちは友人や家族と親しく、コミュニティと文化的アイデンティティを大切にしているといえる。



「私たちの物語、問題解決に皆が関わってゆく様子を描いているのが大好きです。これこそが私たちに欠けているものであり、多くのコミュニティがまだ欠けているものなのです。立ち上がり、私たちの声を届けることが、物事を動かす方法なのです」。

- G.T. Brielle*、18歳、トーゴ

未来から私たちが学べること

根強い課題

作者たちは、すべての物語の中の「誘因となる出来事」と呼ばれる、主人公を旅に立たせる出来事について考えるよう求められた。2055年にジェンダー平等の根強い課題があると作者が考えていることを知るのは興味深い。

- 気候変動: 気候変動の影響は、今後何世代にもわたり対処しなければならないものであり、先住民の知識は最善の適応手段であると思われる。

- GBV: あらゆる形態のGBVが、政府の措置と活動により減少したが、依然として懸念される問題である。

- 社会規範: 根深い社会規範が、平等への最も厚い障壁とみなされているようだ。多くの作品で、主人公が予想外の反発に遭い、意表を突かれる場面が描かれている。伝統的な高齢の男性指導者の抵抗がみられたり、男の子の間で保守的な考えが生まれることが原因とされることが多い。時には、女性と女の子はそこまでしかできないというコミュニティ内の隠れた意識や、不可視であるジェンダーの障壁を取り除くために新たな男性性に取り組む必要性が、物語から明らかになることもある。

- すべての人のためのジェンダー平等の未達成: 15編の物語ではジェンダー平等に関する目覚ましい前進が描かれているが、女性的なステレオタイプに適合しない・伝統的な部族に属する遊牧民・ヒジャブを着用する・難民・自閉症の女の子やLGBTQI+の人びとなど、一部の集団は依然、取り残されている。ここから、ジェンダー平等への交差的アプローチが一層重要となっているという明確な主張が読み取れる。

- 問題はまだ終結していない: 女性と女の子の権利とユースの教育やテクノロジーの享受が一度は達成され、問題が解消されたかに見えたが、政府や社会の優先順位や投資の変化により、成果を損なわせ、将来の世代に悪影響を与えたりする可能性があることを描写した物語がいくつかある。



決意を固める

物語は通常、主人公が課題を解決したり、対処したりするところに到達する。作者が主人公の挑戦の解決を想定する共通の型を観察するのは興味深い。

- 対話による合意: 解決に至るために、主人公たちはコミュニティ住民を巻き込み、会話を促し、彼女たちは人前で話す能力や高度なデジタルコミュニケーションスキルを活用し、自身のデータ・芸術・語りを通じて重要なメッセージを示す。コミュニティの理解と解決策の共同創造が、女の子と女性の権利の向上・維持に必須であるという強い認識がみられる。

- 世論の圧力が重要: コミュニティ住民は、すでに達成されたものを変更・守る必要性を認識すると、彼らはオフ・オンラインでの運動への参加は、政府に働きかける有効な手段として考えるようになる。

- 政府の強い役割: 政府は、女の子の取り組みを実施・拡大し、体系的かつ長期的な変化を可能にする重要なアクターとして描かれている。



ジェンダー平等の未来

物語では、脇役の存在・舞台となる場所・構成方法といった要素が、ジェンダー平等の実現方法に関する洞察に満ちた示唆を示している。

- 変化には時間が要る: 物語の中で圧倒的な存在感を放つ祖母の存在は、世代間の次元の違いと、変化が完全に実行されるには確かに時間がかかるという意識を示している。主人公より先代の女性活動家に敬意を表し、ジェンダー平等が当たり前のものと片付けられてはならないことを認める素晴らしい方法である。主人公たちは長期的な影響の保証には、彼女たち自身の提唱活動が重要であることを理解している。

- 地元から世界へ: 登場人物のほとんどは村や小さなコミュニティに住んでいるが、それにより彼女たちの国や世界への影響力やリーダーシップが制限されるわけではない。地元での変革が世界での変革を促すという認識が共有されている。

- 英雄伝ではない: 大部分の物語では、主人公一人による解決は描かれておらず、有意義な変革を成し遂げるには、友人・家族・コミュニティ住民・活動家・政策立案者の関与が必要とされている。

> 「(2055年でも)女性に対する偏見がまだ少し残っていて、真のジェンダー平等への取り組みは道半ばです」。
>
> - Reem、20歳、エチオピア



2025年へ戻って

私たちに刺激を与えてくれる本物語集を一読する際は、執筆者が伝えたいことを意識していただきたい。

これらの物語は、ジェンダーの障壁が除去され、彼女たちが活躍できるように全面的な支援があれば、女の子と女性がいかにコミュニティ・国・世界に貢献できるかを示すほんの一例である。

未来はまだ形成されておらず、私たちは共に、物語で描かれたものよりも素晴らしい未来を創り出す力を持っている。

立ちはだかる大きな課題を前にし、自身の役割は小さいと思われるかもしれない。彼女たちが物語の中で成し遂げたこと、そして作者たちがコミュニティで成し遂げていることを見てほしい。自身の責任を真剣に受け止め、今すぐ行動してほしいのだ!

物語を楽しみ、女性と女の子の素晴らしい未来を一緒に作ろう。

15編の物語





変革をコードに乗せて
- Adiatu (20歳、ガーナ)

16歳のZainabは、スマートウォッチからさらに数行をコーディングしながら、母親の空飛ぶ車を降り、先進都市ホーホーの快速列車に乗り込んだ。Zainabはいつものカラフルな服装で、彼女の高揚した気分とマッチしている。多忙なプログラマーの頭脳に休息を与え、窓から外を眺め、彼女の住む街の信じられないほど美しい緑の風景を眺める。2055年、彼女の国ガーナは大きく変わった。女の子と女性は社会のあらゆる分野で大きな変化を遂げ、ホーホーでは基本的にすべての若者がコードの書き方を知っているような幸せな場所になっている。アフリカの若者として、Zainabは自身のコミュニティを愛し、そこに住めることを幸運に感じている。彼女は自身の文化を誇りに思い、美味しい食べ物を食べたり、友人と踊ったりすることが大好きだ。

いつも通り、電車に揺られてすぐにコミュニティセンターへ行き、そこで友人と上級コーディングを学ぶ。その後は、仲間たちと一緒に歩いて学校に行き、科学や数学等を学ぶ。そして、彼女は毎週末の夜に開催される、新たな国の文化を深く掘り下げていく仮想現実のワークショップを楽しみにしている。

彼女がコミュニティセンターに入るやいなや、皆のスマートウォッチが一斉に点滅した。生中継のインタビューで、技術大臣は、今や誰もがコーディングの方法を知っているので、政府は他の優先事項に投資しなければならないと言う。Zainabと彼女の友人は、耳を疑った。基本的なコーディングはオンラインで習得可能だが、センターは、基本的なコーディングを学ぶ場所以上のものだ。ここでは、極めて興味深い試みが実施され、若者同士が実際に顔を合わせて交流できる安全なスペースを提供している。未来の世代はどうなのだろうか。彼らも同じ機会を享受できるべきではないのか。皆、悲しみに暮れ、このニュースに打ちのめされた。

Zainabは違った。この措置の彼女の友人・コミュニティや、今後生まれてくる女の子に与える影響に対する懸念が、彼女の心に火をつけた。彼女はコーディング・センターを存続させ、彼女のような女の子が世代を超えてデジタル教育と機会にアクセスし続けられるようにすることを決意した。彼女は今までにない早さで、家族や友人に協力を求め、コーディングのスキルを駆使し、24時間以内に資金を集め、全国のコーディング・センターを存続させるためのアプリを用意した。しかし、彼女の戦略はあまりうまくいかなかった。大半の大人は、公的資金をもっと適切な問題に使うことに賛成だった。若者たちはすでに十分な支援を受けているし、彼らのコーディング技術は集団の利益のために使われているのではなく、もっと個人的な利益のために使われていると考えていたのだ。Zainabは落胆し、自身を疑い始めた。夕方、友人や家族は彼女を元気づけようと、くだらないことで彼女を笑わせた。両親は、彼女が解決策を見つけると確信していた。Zainabは、皆が寝静まった後、自分のコミュニティがどれほど自分に力を与えてくれたかを日記に書いた。

翌朝、彼女はアプリのプログラムを変更し、#CodeForChangeというソーシャルメディアキャンペーンを開始した。Zainabは、国内のすべての人に自身のコミュニティへの夢を共有するよう求め、若いプログラマーに、彼らの夢を実現するために自身のコーディング・スキルをどう使えそうか考えるよう促した。キャンペーンが始まって間もなく、ホーホーだけでなくガーナ全土の多くの人びとや地元企業がコーディング・センターの継続のために夢を共有し、資源を寄付してくれた。

やがて、スマートウォッチが点滅し、技術大臣がソーシャルメディア上でライブを開始した。大臣はこのキャンペーンを賞賛し、若者のコーディング・スキルが集団の利益のために使われる可能性があることを彼女と彼女のチームに示したと述べた。また、彼女は、ガーナ人の夢を実現するソリューションの開発に関心を持つすべてのコーディング・センターに対して、政府から多額の投資を行うことを発表した。

Zainabはテクノロジーとコミュニティが歩調を合わせる国に住む、自信に満ちたリーダーだ。彼女はいつも通り、今朝も高速列車に乗車する。Zainabの運営するコーディング・センターで展開中の素晴らしいプロジェクトの最新情報の通知がスマートウォッチに絶え間なく表示されるが、彼女は通勤時間を話しかけてきて夢を分かち合う人びとと話すことに費やすことを好む。というのも、彼女はコードが世界を変えられることを認識しているとはいえ、コミュニティが心の拠り所となっているからだ。



夢が現実になる日
- Thialal (20歳、セネガル)

Tracyは軽快に動き、ドリブルでCéline・Manon・Margotを抜き去る。彼女がレーンを突破すると観客から歓声が上がる。Tracyは優雅に跳び、腕を伸ばし、ボールをSophieの手がわずかに届かない位置に放つ。ボールはバックボードに当たってきれいにネットから落ちる。まさに完璧。Tracy、Tracy、Tracy! セネガルバスケットボールの誇りである。

「Tracy、学校に行く時間よ!」と母が台所から叫ぶ。

Tracyの空想は途中で遮られた。彼女は世界で一番好きな場所である家の屋根から降り、また大変な一日に立ち向かう。彼女のショートヘアは常に議論の的だった。ドレスやスカート?似合わない。Tracyは木登りやスポーツに便利なジーンズや短パン、Tシャツを好んだ。彼女の外見・行動力・率直さはいたるところで批判された。学校の女の子はもちろん、教師でさえも、彼女を「男の子みたいだ」と批判した。バスケットボールやフットボールをするときでさえ、彼女は偏見に遭い、一部の男の子は彼女を「男っぽ過ぎる」と感じ、彼女の才能を妬む女の子もいた。その上、彼女と正反対で、男性から注目され、プライドは人一倍高く、外見を気にする、Tracyの姉Magatteは、男の子に人気があった。「なぜお姉ちゃんのようになれないの?」と母は常に問うた。Magatteはこう応戦するだろう「努力が足りないの、Tracy。あなたは自分を疎外しているのよ。男の子はあなたみたいな女の子は好きじゃないのよ」。Tracyの父親の沈黙も、やはり彼女を傷つけた。

Tracyは自身に満足していた。彼女は自身の髪型が好きで、スポーツが与えてくれる自由な感覚を愛する、才能あふれる誇り高きアスリートだった。 動きの速さ・チーム精神・競争。毎日、彼女は女の子でも十分に活躍できることを証明していたが、誰も気にしないようだった。彼女はいつも近所の男の子たちと冒険に出かけ、服装やマナーを気にすることなく彼女の村ングイノーレールの広大な通りや、テランガ（セネガル）のルーガ地方全体を探検したが、それは実に楽しいものだった。彼女は、穏やかで従順な女の子の役割の押し付けに抵抗した。Tracyは、自身の信念に従って生きることを決意した反逆児だった。しかしもちろん、誰だって批判されたり笑われたり怒鳴られたりするのは嫌なものだ。彼女は疲れていた。男の子として生まれたなら楽だったかも知れない。そんな中でも、Tracyは、裁かれることなく自由に自身の道を選べる世界に憧れていた。

ある夜、Tracyは彼女に似てはいるがずっと年上の女性が近づいてくる夢を見た。「女の子の未来が見たい?ついて来なさい」と、その女性は言った。Tracyは一瞬にして、緑に覆われた建物が立ち並ぶ未来のングイノーレールの空中に浮遊状態になった。すべてが調和しているように見え、同じスタイルの人を二人と見ることはできなかった。皆、服装やエネルギー、表現に個性がみられた。活気に満ちていながら、静かで、平等な世界だった。「2055年へようこそ」と女性が言った。「ここで、女の子は、自身の人生・情熱・外見・行動を制約なく自由に選ぶことができるの」。

Tracyはすべてに感激した。それは可能なのだ!心の奥底で、彼女はそれが可能であることを知っていた。その後、その女性はTracyをセネガルで最も有名なバスケットボールコートに連れて行った。コートの前には、彼女の美しい銅像と「最高のバスケットボール選手。ジェンダー平等のチャンピオン」と刻まれたプレートが建っていた。Tracyは目を疑った。「さあ、答えが見つかったわね」と女性が言った。「女の子の未来は、あなたのおかげで良くなるわ」。Tracyは、どうやってと尋ねようとしたが、旋風に突然さらわれ、目を覚ました。心臓がドキドキし、夢は鮮明に残っていた。彼女は窓に駆け寄り、見慣れた世界を新しい目で見た。彼女は、疑念を抱いているのは自身だけではないと理解した。変化は可能なのだ。

そのときから、Tracyは侮辱的な意見に脅えることをやめた。彼女はスポーツを愛し、好きなものを着て、すべての女の子にとって自由な未来を望む権利を主張した。Tracyは家族や友人に自身の考えを共有し、ジェンダー不平等・性差別的なステレオタイプ・女の子と女性への暴力に関して議論するブログ「Free Girl」を始め、フェミニストの会議や集会に参加して、多様な女性から支持を得た。徐々にではあるが、彼女は変化を確かめることができ、セネガル、そしてアフリカ大陸で最高のバスケットボール選手となったとき、彼女はその強力なプラットフォームを利用して、女性と女の子の権利を訴え続けた。

2055年、46歳になったTracyはバスケットボールを引退したが、今でも世界中の女の子たちの大きな発想の源であり続けている。彼女はスポーツクラブを運営し、毎年何千人もの女の子を迎え入れて、スポーツとジェンダー平等について教えている。自身の価値を知れば、女の子であることがどんなに素晴らしいことか!



成長を紡ぐ糸
- Jhussahara (20歳、ペルー)

ペルーの高地、パスコ地方にある活気あふれるパランチャクラ村の、色とりどりの壁画が教育・農業・科学等での女性の偉業を称える広場の近くに13歳のKillaは住んでいる。毎日、学校に行き、可能性を探求するのが楽しみで、目を覚ます。STEMに熱心なKillaは、一見解決不可能な問題の解決策を見出すことに特別な魅力を感じている。だが、その朝、Killaは複雑な思いを抱えて登校した。ペルー政府は、同国の現在の環境危機に対する有効な適応策の開発を目指し、STEMに熱心な学生を対象とした環境問題コミュニティClimathonを始動させ、優秀者には、提案した解決策の大規模実施の機会への参加が約束されていた。これは、気候変動の影響が現在の科学的知識では対処不可能なレベルに達しているため、極めて重要な取り組みであった。Killaは教師のMartaに、参加するために小グループを組まないかと頼まれたとき、舞い上がった; Killaは優勝の可能性が高いと思ったのだ。こんな好機を拒む理由がどこにあるだろうか。彼女の気候不安は高まっていた。Killaは自閉症であり、予期せぬ気候変動によって日常生活が常に乱されることは、すでに彼女の内面のバランスを崩していた。さらに、彼女の家族の中にある植民地主義の重みはすでに長引く存在であり、諸刃の剣である彼女の鋭い記憶力は、絶望的な状態・気候データ・破滅的な未来予想図の無限ループに彼女を巻き込ませ、彼女は窒息しそうな、罠にかかった感覚に襲われた。Killaはあまりにも多くのことを感じ、あまりにも深く気にかけすぎていた。そして最悪なことに、誰も彼女と同じように感じていないようだった。もし彼女にも問題解決が不可能に思えるなら、解決への正しい道筋を誰が発見できるだろうか。

Killaが学校に着くと、嬉しいことに、Martaがクッションや感覚器材でいっぱいの静かな部屋を用意してくれていた。部屋の真ん中には、大きくてカラフルなかぎ針編みの毛糸が置いてあり、癒しを感じた。Killaが選んだ超優秀グループの女の子3人が次々とやってきた。Killaは毛糸で手を動かしているうちに、気候変動の未来に対する嫌な気持ちを集中し、はっきりと口にすることができた。当初は、空気を換えて解決策に向かうためのガス抜きのように感じたが、次第にグループを支援する力になっていった。他の女の子たちも毛糸を手にして、自身の不安を分かち合った。Jazminは、海面上昇のために家族がリマにある家を突然放棄しなければならなくなったことを寂しく思っていた。Suyaiの両親は農作物の減少で経済的に苦しく、彼女は選択したSTEMの授業を放棄して労働するか、弟のケアのために家にいなければならないことを心配していた。Alejandraは炭鉱での仕事を失い、過度の飲酒をし始めた父の最近の様子に怯えていた。

ジェンダー平等教育や全国の女の子を対象とする無料STEMプログラムといった基盤があるとはいえ、気候変動が女の子にとって、夢見る実際の未来よりもずっと過去のような未来を広げてしまうかもしれないと思うと、憂慮すべきことだった。毛糸に絡まった彼女たちの手を見て、Killaは祖母のGloriaとその教えを思い浮かべた: ケチュア-ヤル族の祖先が、人間を含むすべての生命体が相互につながり、バランスを保つために不可欠な大きな網である世界をどう理解していたかを。彼女たちは、何世代にもわたって受け継がれてきた知識について考え始めた。何世紀にもわたって異なる天候パターンに対処する方法など、自然のリズムの変化にいかに適応してきたかを認識した。これらの知識と自身の経験を組み合わせて、それぞれの解決策を小さな紙に書き、毛糸のどこかに貼り付けた。

- 失業者を募り、アンデス山脈の原生林の植え替えや伝統的な用水路の修復を行い、干ばつを減らす
- トトリラ(葦)の利用を増やして水を浄化し、周辺コミュニティの水質を改善する
- 多様な作物を農林複合体系に統合し、食料安全保障を保障するためのコミュニティの能力を強化する
- 動物の移動経路の変化を監視し、地域が深刻な影響を受ける前に、人間の移動の必要性を予測する
- 女の子や障がい者など、リスクの高い集団特有のニーズを把握し、施策に統合する

Grant Pachamama (母なる自然)に法的権利を与え、少数の経済的利益よりも生命を優先させる。彼女たちは気候変動への適応策の全体像を提示し、それを見たClimathonの審査員たちは、気候変動に関する女の子特有の経験は必ずしも弱点ではなく、すべての人にとってより効率的な解決策を生み出すために真剣に考慮されるべき貴重な貢献であることに気づいた。

今朝、Killaはいつもより早く起き、Jazmin・Suyai・Alejandraに会った。彼女たちは皆、ニットを着て環境省の気候変動担当閣僚との会合に向かい、解決不可能と思われる問題に熱心に取り組んだ。



二度と繰り返さないために
- Kadiata (23歳、ギニア)

15歳のAïchaは、ギニアの猛暑の中で眠れずにいた。Aïcha家中が静まり返り、皆が寝静まるとすぐに、彼女はほとんど理解できないような不正義について話す女の子と女性の声が聞こえてきた。「女の子が花嫁として売られている」「FGMは法律で禁止しなければならない」「何百万人もの女の子が月経用品がないために学校を休んでいる」。

この声はどこから聞こえてきたのだろう?意味がわからない! 彼女の村で、女の子は毎日学校に通い、無料の月経用品や清潔で安全な設備を利用していた。FGMやCEFMUは法律で明確に禁止されていた。

最初、Aïchaは何か憑き物のような霊の声を聞いたのだと思い、フラニ族の宗教指導者と話そうとしたが、彼らは彼女にそれを許可しなかった。「私たちは、それらの残虐行為に関して語ることはない、Aïcha。悪しき考えを広めるべきではない」と。彼女は母や叔母に話そうとし、教師に尋ね、学校の友人に話した。しかし、そういった考えを持つことさえ強く戒められた。「過去のことは過去のままにしておくこと」と彼らは主張した。

真相を明らかにしようと決心したAïchaは、消灯時間になっても起きていて、その声に直接立ち向かった。驚いたことに、それらの声が、最近亡くなった祖母から受け継いだ小さな木製の人形からだったのだ。 中が空洞になっているその人形の中に、彼女は小さなデジタル装置を発見した。そこには写真・ビデオ・証言・報告書の膨大なアーカイブがあり、過去に彼女自身が住んでいたフラニ族のコミュニティでさえも、女の子と女性が耐え忍んだ恐怖が詳細に記されていた。そのアーカイブが、Aïchaの祖母が彼女に残した本当の遺産だった。明らかに、Aïchaはその夜一睡もできなかった。「どうして世界は、こんなに女の子と女性に対して残酷だったのだろう?」と彼女は自問した。「今の世代は、平穏で安心していられるのだろうか、それとも、人類は再びこうした蛮行に手を染める方向に進んでいるのだろう?」

彼女は、コミュニティ住民にそれらの有害な慣習の危険性と、現在の自由の実現までの苦闘をしっかり理解してもらう必要性を感じた。だが、単に話すだけでは不十分で、人びとの目を開かせる強力な方法が必要だった。Aïchaは、近々開催される毎年恒例の学校での学生フェアがチャンスだと考えた。学生フェアでは、全生徒が小さな展示ブースを企画し、村人全員が参加する。学生フェアは、Aïchaの村で楽しみにされているイベントだった。彼女は、自身の技術と祖母の膨大なアーカイブを活用し、有害な慣習の被害を受けた女の子と女性の物語を伝えるバーチャル博物館を設けた。拡張現実メガネを使って、来館者は30年前、2億人以上の女の子と女性が、文化的・宗教的伝統の名の下に、FGMを受けた可能性があることを示すグラフを見ることができた。また、コミュニティに受け入れられ、将来の結婚を保証するためだけに、娘にFGMを強制したことに対する後悔の念を語る親の証言を視聴することもできた。彼らは、娘に与えている恐ろしい慢性的な痛み、泌尿器系や性的な問題に気づくことはなかった。CEFMUのバーチャル・ルームでは、来訪者は、教育レベルの低下・社会的孤立・早期妊娠・高い妊産婦死亡/性感染症(STI)リスク・GBVの永続化など、花嫁にされた女の子への負の影響を知ることができた。

Aïchaは問題だけを紹介することは対話よりも抵抗を生むことになるとわかっていたため、過去数十年間で女の子へのこうした重大な暴力がどう解決されたかを伝えるニュースメディアやキャンペーン資料も展示した。来訪者は、市民社会組織(CSO)が宗教的・伝統的指導者や家族を巻き込んでいる写真やビデオ、各国で採択されている新しい法律、学校、医療施設、コミュニティセンター、オンラインでの強固な啓発活動、有害な慣習の被害者に対する法的・精神的・身体的医療や教育サービスの提供などを見ることができた。

バーチャル・ツアーの最終地点では、サバイバーが、ジェンダー差別の恐ろしい結末として、また、有害な慣習の初期兆候の特定とその拡大を防ぎ、世界中のすべての女の子と女性の性と生殖に関する権利を再確認する方法として、来訪者にそれらの記憶を記憶にとどめるよう訴えた。

フェアが進行するにつれ、Aïchaのバーチャル博物館を体験しようと、多くの村人が列に並ぶようになった。夕方になり、村の最高指導者である父親のIaamiidoが、Aïchaのプロジェクトの反響を見て、彼女に声をかけた。「娘よ、私は一日中お前を見ていた。母も誇りに思うだろう。過去を思い出すことは、古傷がよみがえるだけだと思っていたが、記憶はよい未来を築くのに役立つのだと、今日、教えてもらえた。私たちは、このバーチャルな展示をギニア全国、そして国外の人にための実際に存在する博物館にしたいと思う。それにより、あのような残虐行為が二度と起こらないようにするのだ」。その夜、Aïchaは祖母の遺志を継ぎ、何わたって女の子たちの未来を守ってきたことを実感し、ようやく安心して眠ることができた。



砂漠を旅する学校
- Anguach (24歳、エチオピア)

私の名前はTesfanesh Bihonage。首都アディスアベバから約1,000キロ離れたエチオピア北部の住む遊牧民のコミュニティに属する、20歳のユース女性で、身体障害者です。私は、喜びや悲しみを分かち合いながら支え合う私たちの文化や、土地や旅をする動物たち、砂漠やそこに住む生き物たちとの強い精神的なつながりを深く大切にしています。澄み切った夜空の下、私たちは歌い、踊り、ラクダのミルクを飲みます。

私が生まれたとき、私の両親を含むコミュニティのほとんどの人は、気候変動が彼らの健康・食料安全保障・異常気象に関連する身体的安全性に関する問題のために、遊牧生活を放棄していました。このことは私たちの多くにとって大きな文化的ショックでしたが、その変化による予期せぬ好ましい結果として、女の子が規則的に学校に通い始めました。昔は、私たちの部族の女の子と女性は、水や薪を汲んだり、機織りに食料の栽培、料理などをしたりするのが仕事で、他のことに費やす時間はあまり残されていませんでした。勉強は男の子の特権でした。女の子が読み書き以上のことを学ぶことが重要だと家族が考えていたとしても、学校までの長く、危険も伴う道のりを考えると、保護者は女の子が正式な教育を受けることに消極的でした。

ですから、一時的に定住生活が送れるようになったことで私は学校に通え、Malala YousafzaiやGreta Thunbergといった世界的な女性リーダーの伝記など、次々と本を読み漁りました。彼女たちは現在50代ですが、非常に若い頃から変革を求めて戦い続けており、私も同じように活動したいと望んできました。5年前、私のコミュニティがエチオピアの大学と提携し、高温に耐え、長期間の食品保存が可能なテントを開発したとき、長老は、私たちのアイデンティティの重要な要素である遊牧生活を復活させる時が来た、と決断しました。

私と私の友人は不安でした。先祖の自由な移動を体験し、自然と再びつながりたいという思いはありましたが、学業を断念する覚悟はできていませんでした。ある夜、コミュニティでは長い年月を経て、最初の移動を開始する準備がされ、久しぶりに、私たちは歌い・踊り・ラクダのミルクを飲み・何世代にもわたって語り継がれてきた物語を語りました。そのとき私は、私たちだけでなく、エチオピアのすべての人に関連する知識や知恵を、私たちのコミュニティがたくさん持っていることに気づいたのです。私たちは土地再生の達人であり、適切な在来種による土地の保護と再生について多くのことを知っており、炭素隔離を増加させる生態系、自然を正確に表現する複数の方言、動物相や植物相の微妙な兆候を読み取り、どんな機械よりも天候の変化を予測する方法を知っていました。私はこの驚くべき知識を活用できることを誇りに思い、全世界の人びとが同じようにできることを願っていました。

出発前に、私は女の子のグループを組織し、一緒に長老たちに話を聞きに行き、コミュニティとしての私たちの最も本質的な側面に敬意を表し、同時に私のような障害者も含めて継続的な教育を保証する方法について、詳細な提案を行いました。以下は、私たちが提案し、現在実行していることです。

- 女の子と男の子の役割分担をより明確にし、全員が平等に勉強できるようにする。
- ソーラー・テントの一部は、インターネットと電波に接続できる学習専用ハブとして、国のカリキュラム内容に沿った動画や音声授業やオンライン指導を受けることができるようにすること。また、教材の内容を私たちの実際状況にどう適用するかに関し、頻繁に意見交換を行うこと。オフラインでの授業は、私たちの移動経路上で最も遠隔である場所で提供されるようにする。
- 当初は、英語・数学・理科など、通常学校で教えられる内容やスキルを、勉強の進んだ者が若い世代に教える役割を担っていましたが、後に、私たちは公費で教師を確保することに成功しました。
- 長老たちは伝統的な知識・先住民の言語・生態系を伝える役割を担っています。私たちはいつも、年配の女性たちの農業・薬草・美術工芸・紛争解決など、幅広い専門知識に感銘を受けています。
- 私たちの多くの試験や評価は、季節間移動を考慮して行われ、厳格な評定付けではなく、能力やスキルに基づきます。ただし、私たちのほとんどは優れた成績を収めています。

集団的な気候監督と環境保護に対する強い意識から、また2055年に世界中で起こる気候変動に鑑み、私たちはエチオピアの他の地域や世界と貴重な知識を共有する必要性も感じていました。こうして私たちは有名なデジタル・インフルエンサーとなり、後に正式に国の学校カリキュラムに組み込まれることになったのです。現在、私たちは、砂漠を旅しながら、前例のない現代に不可欠な先祖伝来の知識を分かち合う無料のオンライン・スクールとして、全世界で知られています。



真珠が伝える知恵
- Joselyne (25歳、ルワンダ)

あなたが何を考えているかはわかります。どうしてSSL (ソラリアの手話)がわからないのに、私が言っていることを全部理解できるのだろうか。まあ、それくらいテクノロジーの利用可能度が高いということ。あっ、申し遅れましたが、私はSolara、15歳で、もうお気づきだと思うけど、テクノロジーが大好きなんです。

私の車椅子を見て。恰好良いでしょう? どこにでも連れて行ってくれるし、この素晴らしいアプリとつながっていて、あなたの言葉を聞いて、私のためにSSLに変換してくれるんです! 私が手話で話せば、あなたは私の言葉をどんな言語でも読んだり聞いたりできる。そのためにいくら払ったか知ってる?ゼロだよ!ここソラリアでは、誰もが基本的な必要なものを無料で手に入れることができる。特に私は孤児で、自分でこのレベルのテクノロジーを入手することはできなかったので、本当に嬉しいです。ここでは誰も取り残されることはありません。ユースが自由に参加できる「Tech School」で、私は、技術クラブを率い、世界中の喫緊の問題を解決するために女の子が果たす役割について議論しています。私たちは世界のあらゆる地域から訪問者を受け入れており、誰もが私がテクノロジーに反対しているとは思わないでしょう。しかし、私は人間中心のテクノロジーの創出の重要性を訴えるために、今日ここにいるのです。

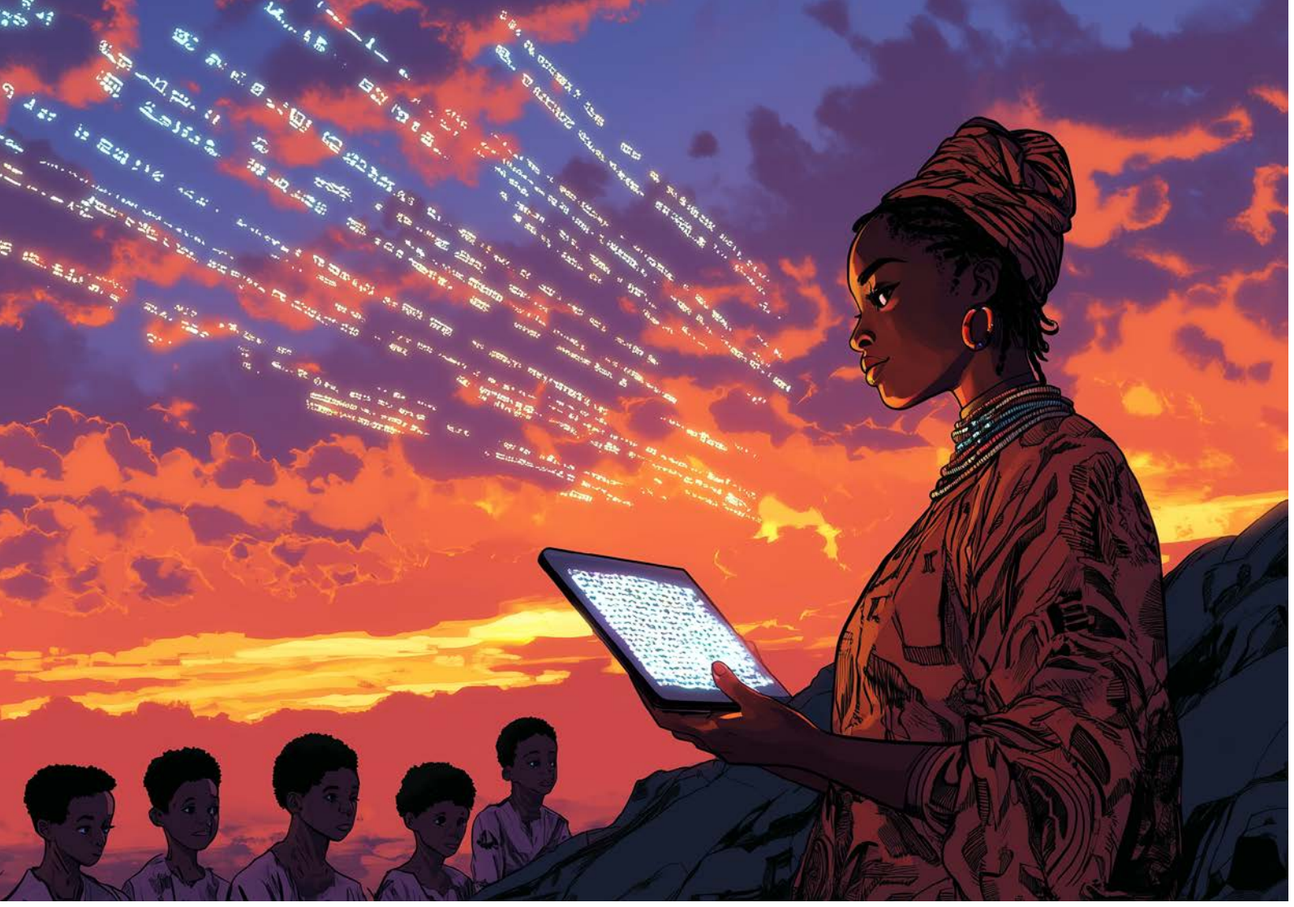
お話した方が、もっとわかってもらえるかもしれない。髪につけたこの真珠が見えますか?これは、私の祖母のNanaからもらったもの。女性は自身の大切な考えを貝のように内に秘めておくべきだという考えがあったのです。しかし、Nanaはそれを変えました。黙って夫に従うべきだと教えられたにもかかわらず、彼女は科学への情熱を貫きました。彼女のおかげで、私は若い科学者になれたのです。「お前は強い。愛されている。完璧だ。お前の名前はSolara。太陽のように輝き、世界をよりよい場所にするために生まれたのだ」と、祖母は毎日、祈りの言葉のように繰り返し私に言ってくれました。彼女が髪の真珠をなでながら、この数十年でどれほど物事がよくなったかを語るのを隣で聞く時間が私は特に好きでした。昨年、彼女は亡くなりました。私が打ちのめされ、長い嘆き悲しんだことは想像に難くないと思います。でも、そうじゃなかった。泣きもしなかったのです!不思議でしょう?

技術クラブの仲間も私もそう思っていました。愛する人の喪失で悲嘆に暮れると読んだことがあります。ですが、私たちは皆、その際に何も特別な感情を覚えず、ただ平穏な時を思い出していました。私たちの世代は何か問題があるのでは、と思い、私たちは、ここソラリアの98%のユースにみられるそのような行動の原因を理解するために大規模な調査プロジェクトを実施し、2040年から実施されている政府プロジェクトを知ることになりました。ソラリアの保健所や病院で生まれた人は全員、保護者の同意なしにAIを脳に埋め込まれていました。なぜそんなことをするのでしょうか?人びとをより効率的にするためです。この国の技術革新の速度は、悲しんだり喜んだりして無駄にする時間を許していません。

最初、私は劣等な人生を送るよう宣告されたような気がしました。それから、この真珠を髪にこすりつけながら、Nanaの言葉「世界をよくするために」を思い出したのです。そして私は技術クラブの女の子を巻き込み、脳内AIを無効化して自身の感情をコントロールする方法を見つけました。私たちは、お目込みとユースのメンタルヘルス問題の増加との間に強い相関関係があることを発見し、プロジェクトを中止するよう政府を説得しました。

私たちは今、感情に基づいた生活に適応しつつあります。私たちは学校や技術クラブに安全なスペースを設け、そこでユースが集い、本当の気持ちとの向き合い方を学んでいます。その結果は驚くべきものでした。女性の地位委員会第99回会合が開催される今日、何千人もの聴衆、そしてさらに多くのオンライン参加者を前に、ソラリアが新たな時代を迎えていることをお伝えできることを嬉しく思います。今まで他人同士のように暮らしていた親子が再び愛情を感じています。芸術家が彼らの創造性で私たちを刺激します。そして、女の子と男の子は、テクノロジーは人間性を支配するのではなく、高めるために役立つべきだと知っています。

私はSolara、Nanaの孫で、ソラリアの住人です。ここで私たちは皆、太陽のように輝き、この世界をよくする使命を担っています。



一編の詩が世界を変える
- G.T. Alia (21歳、トーゴ)

Adjoaは親友のKwameに「詩の読み上げ大会で優勝したよ!!!」とメッセージを送ろうとしたが、送信できなかった。彼女は複数のソーシャルメディアでKwameのプロフィールを探したが、すべて削除されていた。一瞬、Adjoaは彼女に縁を切られたのかと疑ったが、思い当たる理由がなかった。そこで彼女はKwameの家に様子を見に行くことにした。2人はガーナのコジョという小さな村に住んでおり、Kwameの家はAdjoaの家からそう離れていない場所にあった。Kwameは、自身がある種のディープフェイク・ポルノの被害に遭い、絶望のあまりオンライン上の存在をすべて削除したのだと話してくれた。この24時間で何件も事件が発生し、多くの女の子がネットの世界にきっぱり見切りをつけようと話していたのだ。

彼女をなだめ、SNSプラットフォーム会社や警察、サイバー犯罪を担当する政府機関に必要な届出を済ませた後、Adjoaは、このようなことがなぜ未だに起きているのかを理解しようとした。2055年までに、すべてのプラットフォームは、匿名による行為を避けるためのデジタルID認証と、ジェンダーに基づくデジタル暴力を含むあらゆる形態の虐待をリアルタイムで防ぐためのAIによる規制を導入するようになっていた。長年の議論の末、表現の自由を保証しつつ、あらゆる形態のハラスメント阻止のための世界的なデジタル指針が合意に達し、すでに実施が進められており、Adjoaは、ジェンダーに配慮したデジタル倫理は、その頃には常識になっていると思っていた。

数日後、ガーナ政府は声明を発表し、すべてのデジタル保護柵を回避できる新技術を、未特定の犯罪集団によって開発されたことを伝えた。捜査が行われ、政府はデジタル・プラットフォームと協力してシステムの更新と保護の改善に精力的に務めると述べた。

このような事件が起こるのは初めてではなかった。Adjoaは、オンラインを含むあらゆる形態のGBVから女の子と女性を守るための対外的な対策が効を奏しているにも関わらず、社会規範が同じスピードで変化していないことに気づいた。彼女は、この根本原因を解消しなければ、新たな技術開発が起こる度に、サイバー犯罪に再び備えなければならないことを理解していた。それは疲れるし、不公平だった。彼女は、友人たちがデジタル空間から距離を置きたがる気持ちは理解できるが、あらゆるデジタルスキルが要求される世界では、オンラインでデジタルに精通しないわけにはいかない。加えて、オンライン空間は教育や、公的な討論の場で意見を述べる上で、極めて重要な意味を持ち続けていた。

「どんな画面も恥じることはなく、
どんな言葉も傷つけることはない。
愛・同意・尊敬。
それは特別なことではない。
私たちの声に安全な場所を、
多様な選択肢のある優れた空間。
あなたの居場所、
あなたという存在のため、
それは私たちが望むもの。
さあ、現実はそれほど遠くない」。

Adjoaは微笑み、再び携帯電話の電源を入れた。今すぐこれを投稿しなければならないから。

先日優勝した詩の読み上げ大会の主催者からメッセージを受け取ったとき、Adjoaが無力感を感じていた。「こんにちは、Adjoa!私たちは詩の読み上げ普及のための助成金を用意しており、ぜひ申請してください。私たちはあなたの才能に大変感銘を受けました」。彼女は思いついた!助成金に応募し、その資金で男の子やユース男性に詩の読み上げ技術を教え、女の子と女性へのあらゆる形態の暴力と無関係な新しい男性性のあり方を表現する詩の創作を後押しするのだ。

助成金を得て、Adjoaは国内を旅し、男の子や女の子にとってロールモデルである詩人となった。次第に、健全な人間関係やジェンダー解放に関する新たな社会規範を詠った詩が次々オンライン・プラットフォームから発信され、世界各地に広がり、人びとの心や考え方、行動を変えていった。

長年の懸命な活動の末、女の子と女性に対するサイバー犯罪は減少していった。ある日の午後、Adjoaはデジタル機器の電源を切り、1人で山に登った。頂上に着いたとき、彼女は最も美しい夕日を目にし、即興でつぶやいた。



すべての人のための学校
- Cristina (23歳、東ティモール)*

フィリピン南部の地方から首都マニラへ引っ越すために荷物をまとめたLisaは、嬉しいのか悲しいのか判断がつかなかった。19歳になり、大学の教育学部に入学し、長年の夢である、高度な資格を持つ教師になって、教育期間中に受けた素晴らしい支援のすべてをコミュニティに還元することを追求する時が来たのだ。Lisaはもう祖父母と同居することも、これまでお世話になった素敵なコミュニティで過ごすこともないだろう。フィリピンでは若者の80%が高等教育を受け、あらゆるレベルでジェンダー平等が実現されている。

大学入学後すぐ、彼女はLGBTQI+の権利についてキャンパスで議論する学生団体を組織していたLGBTQI+社会の仲間と親しくなった。Lisaは、LGBTQI+に関する特定の団体を設ける必要性を明確に理解できなかった。彼女は友人を大切にしており、彼らの性的指向や性自認に対する偏見は一切なかった。だが、彼女の故郷の村では、これらはプライベートな問題であり、人前で口にするのは失礼であるとされていた。そのため、LisaはLGBTQI+の人の権利について考えたことがなかったのだ。

最初の数カ月で、彼女は友人たちの多くの経験について学んだ。同性カップルが手をつないでいるのを見た人びとが顔をしかめたり、親友のJoanaがレズビアンであることを同居人に明かしてシェアアパートから引っ越さなければならなくなったり、クラスではLisaがLGBTQI+社会の一員であることから「彼らの仲間」に違いないとグループ課題から除外する学生さえいた。当初、Lisaは、高学歴のユースが性的・ジェンダー的多様性の受け入れに対し、なぜこれほど保守的なのか理解できなかった。ある日、Joanaが彼女に尋ねた。

「今まで学校で、性的指向や性自認に関することを何度聞いたことがある?」Lisaは一度もなかったことに気づき、それは早急に変えるべき大きな問題だと感じた。LisaとJoanaは、LGBTQI+社会でセミナーを開催し、なぜ学校のカリキュラムにジェンダーと性に関するより包括的な取り組みが含まれていないのかを議論することにした。パネルディスカッションを通し、彼らは、30年前、世界がジェンダー平等に対する大きな反発に直面していたとき、SDG4達成のための国の戦略は、誰もが質の高い教育を受けられるようにする普遍化手法を用いることだったが、子どもの教育を危険にさらす可能性のある「邪魔な議論」を避けるため、ジェンダーや性に関する言及は国の学校カリキュラムから削除されたことを知った。その判断の意図しない結果として、LGBTQI+コミュニティに対する差別・スティグマや、若い世代での異性愛主義・家父長制的ジェンダー規範の定着が起きたのは明らかだった。Lisaは、CSEを国の学校カリキュラムに盛り込むための作業部会の設置を提案した。

この考えは国中に反響を呼び、賛否両論を呼んだ。当初、Lisaと彼女の友人たちは大学で一層敵意を向けられ、汚い考えで子どもの心を堕落させていると非難され、この考えを広め続けるなら、学位を付与しないとさえ脅された。その頃、LGBTQI+のアーティスト・アスリート・経営者・科学者・政策立案者が、公の場で告白し、いかに孤立し、自己表現が抑圧されていたか、どれ程性と生殖に関する健康問題が授業で扱われず、すべて自身で解決しなければならなかったか、という学校での経験について語り始めた。次第に異性愛者の支援者も、CSEを受け、自身の身体・健康・権利や他者の経験・ニーズ・視点、および社会的解釈について深く学ぶ意欲を表明するようになった。最終的に、彼らは多様性のある社会が持つ、困難を克服し、革新し、共に繁栄できる力を理解したのだ。この社会的反響の大きさに後押しされ、LisaとJoanaは、教育大臣との面会を実現させ、「みんなの学校」という参加型創造プロジェクトを提案できた。1年にわたり、彼女たちは全国の大学や学校でセミナーを開催し、子ども・思春期の若者・保護者・教師・地域の有力者・コミュニティ住民を招き、内容・インフラ・意思決定プロセスなど、真にみんなのための学校とはどのようなものかを一緒に想像してもらう機会を設けた。

その翌年、彼女たちはそれらの構想をすべてまとめ、質の高い学問的内容だけでなく、同時にフィリピン人が目指す多様で包摂的な社会の基本を教えることができる新しい国立学校のカリキュラムを提案した。



彼女たちの紛争ではなかった
- Nickolle (18歳、コロンビア)

注: この物語は性暴力への言及を含む。この物語はすべて架空であり、作者個人の経験を反映したものではない。

16歳のScarletは、思春期の女の子や男の子からなる大勢の聴衆を前に、毅然とした視線と信念に満ちた声で話し始めた。今から10年前、2045年に設立された平和構築を目的とするNPO、El Amanecer Foundationのユース会議が始まるところだ。普段なら、コロンビアのボゴタをバイクで移動し、財団の活動に女性や女の子を巻き込んでいる時間帯だ。しかし、彼女の母親の1人であるMarianaが、彼女と一緒に共同理事にならないかと誘ってきたのだ。同NPOの職員は「平和維持が世代を超えた継続的な取り組みであることを示すために、Scarletがユース向けのイベントを開くのは素晴らしいことだ」と考えたのだった。

「2025年、私の母、Marianaはちょうど私と同じ年でした」と、Scarletは語り始めた。「コロンビアの武力衝突は最高潮に達していました。母は平和な地方に住んでいましたが、非合法武装集団が再び出現し、本当に平和な場所とは言えなくなりました。ある日、彼女が学校から帰ろうとすると、武装した男たちが玄関にやってきて、『俺たちと一緒に行くか、死ぬかだ』と脅したのです」。

部屋の中は墓場のように静まり返った。Scarletは一瞬目を閉じ、30年も経ってからその記憶を語るのが正しいことなのか自問した。だが、彼女は続けたかった。

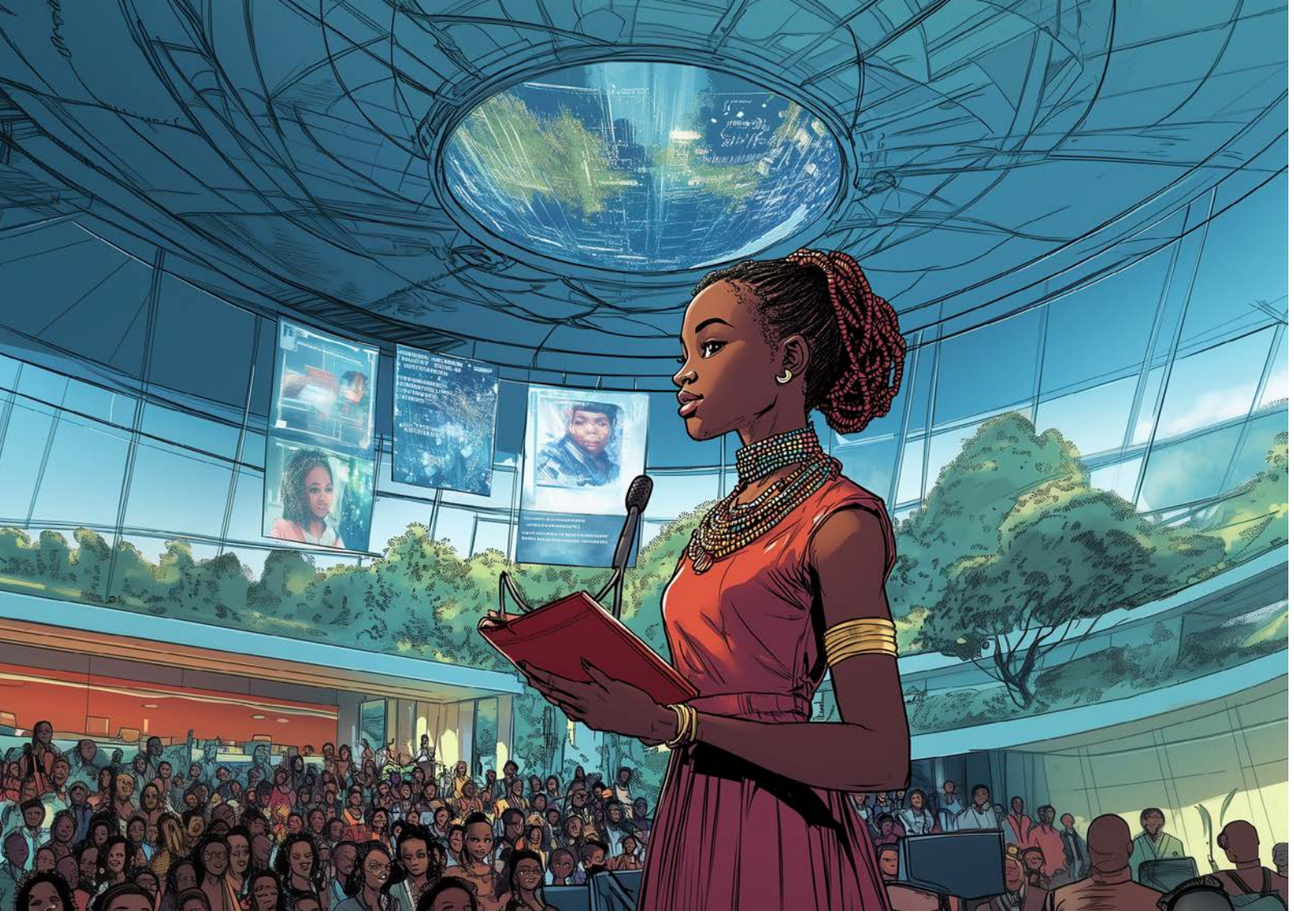
「彼女には選択肢はありませんでした。彼女は家から引き離され、アマゾンのジャングルに連れて行かれました。彼女と同様に、他の思春期の女の子やユース女性も連れ去られ、彼女たちのコミュニティは壊滅的な打撃を受けました。つい最近まで、女の子と女性は紛争の武器として使われていました。私の母は、心理的・身体的・性的虐待を受けました。世界中の紛争地域の女性と同様、彼女は食料・月経用品の入手などの、最低限の権利を奪われ、さらに非人間的な気分に陥りました。そして、妊娠し、非常に危険な状況で中絶を行いました。彼女は何度も命の危機に瀕しましたが、彼女を救うことを諦めなかった強固な女性コミュニティのおかげで、死を免れたのです」。Scarletは話を止め、希望を探して聴衆の熱心な表情を見た。

「私の祖母をはじめ、あの日娘を奪われた女性たちは団結し、あちこちで娘たちの捜索・CSOの動員・政府との会合の設定・メディアとの対話・紛争で女の子と女性が受ける影響がどうであるかを説明する公的キャンペーンの実施を行いました。しかし、彼女たちは社会の無関心・恐怖・不信を経験しました。女の子は既に死んでいるだろうし、捜索を止めるべき、と言われたり、そのような運動は近隣での問題を誘発しかねない、と度々言われました。しかし、彼女たちのたゆまぬ努力により合意が成立し、大部分の思春期の女の子が無事に帰宅したのです」。Scarletは聴衆の中の母Marianaを見つめ、彼女の人生に感謝した。

「残念ながら、このような事件はその後15年間も起こり続けました。2045年、ついに憤りが爆発しました。サバイバー・活動家・ほとんどすべてのコロンビア人女性が、前例のない社会的暴挙の中で声を上げ、『もうたくさんだ！』と訴えたのです。彼女たちは力を得て、そもそも彼女たちの戦いではない紛争の平和調停者となったのです。女性や社会から疎外された集団の声や経験を重視し、対話・共感・合意形成を優先する姿勢によって、彼らはこれまでで最長の和平合意を達成しました。そして、彼らの効率的な復興戦略は、トラウマの克服・教育・コミュニティの結束・経済的レジリエンス・移行期の司法に焦点を当てています」。若い観客の間から、賛同のざわめきが広がった。

「そして2055年の現在、私たちはここで、母と他のサバイバーによって設立されたNPO、El Amanecer Foundationの10周年を祝っています。平和がここにあることを確かなものにし続けるために、女の子と女性が二度と紛争の武器にされることはないよう、私たちが実りある議論を重ね、ユースの意見を取り入れた具体的な行動計画を立てることができますように」。

万雷の拍手が会場を満たした。Scarletは深く息をつき、Marianaに微笑みかけた。彼女の物語と活動家としての活動は無駄ではなかったと確信しながら。そしてScarletは、母の足跡を継ぐ覚悟を決めた。



Nkabom(団結) - ユース女性のリーダーシップへ
- Barikisu (21歳、ガーナ)

演壇の上でマイクを調整する彼女の指はわずかに震えていた。エソム・ニャメ・コミュニティホールの巨大な太陽光発電式ドームは、何千人もの観衆で埋め尽くされ、全員が彼女を見つめていた。17歳のAdoma Asareは、全国女性リーダーシップ・サミットの歴代最年少の講演者であり、彼女が創設し、成功を収めた女の子のリーダーシップ育成プログラム「Girls of Tomorrow」についての講演は、ガーナをはじめ、アフリカ全土に配信された。

ガーナ初の女性リーダーたちの貴重な名言を集めた小さな赤い本に手のひらを押し当てながら、彼女は話した。「未来は今です。30年前、私のようなユースは、リーダーシップがジェンダーや年齢によって定義されない世界を求めました。ジェンダーとユースのクォータ制の導入により、私たちは今日そのような世界に立っています。しかし、私たちは十分に取り組んできたのでしょうか」。

Adomaが、「50-50の世界は第一歩に過ぎず、平等な代表とは単なる会議への参加以上のものであるべきです」と指摘すると、会場は静まり返った。彼女は、年上の指導者の中には、未だに若い世代との完全な力の共有にためらいを見せる人もいると批判し、彼女のプログラムを修了した女の子は、より大きな挑戦に立ち向かう準備ができていると述べた。Adomaは、自身の言葉が全国的な反発を招くことになるとは想像していなかっただろう。

翌朝、Adomaは家の屋上のソーラーパネルがその日最初の光を吸収し始めるころに目を覚ました。デジタルメガネを装着し、彼女の名前が話題になっていたことを知った。ソーシャルメディアは様々な反応で溢れかえっており、彼女が年上の指導者を侮辱し、ユースの未熟さを示したと主張する人や、いつになったらもう十分なのか、と疑問を呈する人もいた。だが、多くのユース女性は彼女への支持を表明した。

Adomaは衝撃を受けた。皆からアドバイスを求められていた人物が、なぜ今、無謀な思春期の女の子として扱われているのか?そして、エソム・ニャメは、あらゆる分野で女性が先導する、包摂性と革新性を備えた見本である、繁栄している町なのに、なぜ今、彼女が疑う余地のない言論だと思っていたことに疑問を呈しているのだろうか?

学校での、AIを使用した公共政策模擬演習での白熱した討論も、前夜の出来事を彼女の頭から離すことはできなかった。教室のホログラム掲示板に緊急ニュース速報が流れた。「政府は女性と若者のクォータ制を停止し、ユース協議会を閉鎖すると決定」。彼女のデジタルメガネは、閉鎖の責任を彼女になすりつけるユース女性たちの認識の変化を示していた。彼女の恩師であり、現在は政府で働いているMadam Akosua Nkrumahでさえ、彼女を非難する動画を投稿していた。

彼女が「Girls of Tomorrow」プログラムを運営していたコミュニティ・ハブに向かう電気バスの中で、彼女はコミュニティで強力な女性の権利のアドボケイトだった祖母を思い出した。祖母がAdomaの髪をアカン族の伝統であるカラフルなビーズで編み、彼女が小さな赤い本に女性リーダーの言葉を嬉々として書き留めていた頃の生活は、とてもシンプルだった。「彼女たちは正しいのかもしれない、私はリーダーになる準備ができていないのかもしれない」、Adomaは自問した。電気バスが急に止まり、Adomaの赤い本が床に落ち、開いたページにはこう書かれていた「リーダーシップとは、待つものではなく、自ら踏み出すもの。そして、他の人を率いていくもの」。

彼女の目が再び輝き出したが、まだ迷いは残っていた。女の子たちの反応が不安だったが、コミュニティ・ハブへ駆け込んだ。「私たちはあなたの味方よ」と彼女たちは言い、「意思決定に参加し続けるために、どうしたらよいでしょう」と誰かが質問した。Adomaは、彼女たちに背中を押されたような気がし、ようやく、自身が全世界を背負う必要がないことに気づいたのだ。彼女たちが出した、意思決定にユース女性の代表性が存在する場合としない場合の未来の、AIによる予測結果から、彼女は自身の家系に息づくNkabom(団結)のエネルギーが身体を巡るのを実感した。彼女たちはすぐに予測結果を政府のAIニュースフィードに広めた。ユース女性のリーダーシップが、これまでにすべての人にプラスの変化をもたらしており、今後もそうであることは明らかだった。やがて人びとは街頭やソーシャルメディアで、ユース女性が公的な意思決定に参加し続けるための施策の継続を求めるようになった。

世論の圧力が強まる中で、Madam AkosuaはAdomaに全国リーダーシップ協議会との話し合いの機会を与えた。心配であったが、Adomaは自身のためだけでなく、後に続く女の子のためにも立ち上がった。彼女は評議会の過去の努力に感謝し、彼らの決定がもたらすプラスの波及効果を示し、未来のためのAI予想結果を提示した。ソーシャルメディアの圧倒的な反響のためか、あるいはAdomaが敵対心ではなくNkabom(団結)を受け入れたためか、協議会は、はクォータ制の復活だけでなく、Girls of Tomorrowで提言されていた、女性とユースの有意義な参加を促進させる改善策も採択した。翌年、Adomaが全国女性リーダーシップ・サミットの壇上に上がり、スピーチを始めると、会場にいた5人の三つ編みの10歳の女の子が小さな赤い本を開き、Adomaの話を注意深くメモしていた。



追い風を受けて
– B. (22歳、ヨルダン)*

Amalは18歳になろうとしていた。彼女は生命力に溢れ、勉強・遊び・祈りを通じどんな些細な常に光を求め、自由を楽しみ、家族や友人と楽しい時間を過ごし、ヨルダンの気候変動対策に関するコミュニティの決定に積極的に参加する女の子だった。彼女に叶わぬ願いは一つを除き、なかった: 単独での海外旅行。世界的な二酸化炭素排出抑制の取り組みにより、2055年には海外旅行がかなり制限されていた。海外渡航には、許可を求め、正当な理由を証明しなければならならず、観光目的の出国は認められていなかった。

そのため、両親から誕生日に何をしたいかと聞かれたとき、Amalの答えはすでに明確だった。彼女がヨーロッパのある場所を選んだのは、気候適応技術に関する彼らの素晴らしい実績があったからだ。彼らの経験から学び、その一部をヨルダンに応用するよい機会になるだろう。彼女は温室効果ガス排出ゼロの飛行機を予約した。渡航許可の通知を受け取り、彼女の胸は興奮でいっぱいになった。今後経験するであろう冒険・新しい友人・追求する新しい夢を想像した。

彼女が目的地に着いたとき、激しい暴風雨に襲われており、それは彼女が期待していた歓迎ムードとはかけ離れていた。借りた部屋に着くまで空港でも、地下鉄でも、常に彼女は睨まれているような気がした。ただ彼女は疲れていて、十分な睡眠が必要だったのかもしれない。翌日、暴風雨は過ぎ去ったが、彼女は自身が渦の中にいるような気分だった。同居人と地元産の有機栽培の朝食を一緒に食べたときから、気候博物館に着くまで、絶えないささやき声・視線・冷たい対応・言葉による嫌がらせを経験した。もちろん、友好的な仕草や温かい笑顔で接してくれる親切な人もいたが、全体的な振る舞いのノイズが消えることはなかった。

最初、彼女は訳がわからず、博物館で紹介されている環境にやさしい技術に可能な限り意識を集中させることにした。飛んでいるガラスのロボットのそばを通り過ぎたとき、そのボディに映った自分の姿を見て、彼女はやっと視線を注がれる理由がわかった: 彼女が想像もしなかった極めて単純なもの、ヒジャブである。頭に巻いた一枚の布が、彼女を好ましくない意味で目立たせ、好奇・判断・敵意の対象にしたのだ。

しかし、Amalはそれに屈するような人間ではなかった。彼女は熟考し、ある考えを思いついた。それは単純で、時代遅れでさえあるかもしれないが、私たちは古いものが時を経て再び新しくなることを知っている。Amalは最寄りの3Dプリントショップに行き、落ち着いた青色のリサイクルパーカーに、多言語で「#Human」と「#HijabiByChoice」と記したデザインを素早くプリントした。そのパーカーを着て店を出たときには、空は暗雲に覆われ、彼女の心の中の不安を反映しているかのようだった。空気は澄んでいて、通りは混雑していたが、いつもと同じように皆の視線が彼女に向けられていた。

すると、いつもと違うことが起こった。人びとが彼女のパーカーのハッシュタグを読み、彼らの表情が変わったのだ。初めて彼女に微笑みかける人もいた。人びとは黙って見つめる代わりに話しかけ始め、ヒジャブや彼女の文化・物語について尋ねようと彼女に近づいてきた。彼女は、皆が敵対的というわけではなく、多くの人は、ヒジャブの着用が個人の選択であり得り、従って自由とエンパワーメントされていることの表現であり得ることを知らないだけなのだと理解した。彼女は旅の中での多くの何気ない会話から、過去30年間に世界がジェンダー平等実現に大きく前進した一方、ヨーロッパ等の一部の地域では、ジェンダー平等と女性の権利の観点から、ヒジャブの着用がほぼ強制的に禁じられてきたことを学んだ。多くの前進があったとはいえ、イスラム教徒の女性に対する誤解が依然、存在していた。ヒジャブは抑圧の道具であり、女性の自律性の欠如の象徴であり、排除されなければならないと考える地域もあった。彼女はそれを想像すらできなかっただろう。故郷では、Amalや彼女の友人たちはヒジャブ着用の有無を選べ、男の子やユース男性と同じ権利を行使し、同じ機会を得ていた。彼女がヒジャブを被るのは、自身の宗教と信仰が彼女にとって重要だったからだ。

数日が経ち、彼女は自国の数多くの素晴らしい気候適応技術を共有する機会にも恵まれた。Amalとヨルダンに触発される人が増え、シンプルな考えから始まったAmalのハッシュタグは、世界中で使用され、リサイクル可能なパーカーが街中を埋め尽くし、ヒジャブに対する差別の根絶を求める投稿がオンライン・プラットフォーム上に書き込まれた。多くの物語が共有され、多くの偏見が解消された。Amalは、ステレオタイプを打破し、多様性を受け入れるための強力なツールとして、より多くの対面での会話を可能にする温室効果ガス排出ゼロのフライトの進化に投資し続けるべきだと確信した。

変化に火をつけるには、小さな火花が必要なこともある。かつてAmalを追いかけていた暴風雨は、彼女の背中を押す風となり、彼女を前進させ、視野を広げた。雲に覆われた日々から一転、晴れ渡った朝、Amalは変わったのは天候だけでなく、自身もそうであることに気づいた。彼女はもはや、渦中で迷うことなく、世界が徐々に会話を通して、互いの違いを理解し・結束するようにさせる運動を推進している。



光が差し込む場所で
- Reem (20歳、エチオピア)

17歳のLucyは、STEMの専門家ばかりの、本当に賢い女性の家庭に生まれた。彼女の祖母は、女の子が学校に行く最初の世代だった。彼女は有名な数学者で教授となり、それ以来、男性優位の分野を女性が占めることを強く支持してきた。Lucyの母は祖母の考えに従い、ソフトウェア・エンジニアとして成功を収めた。Lucyは数学が非常に嫌いた。試験には合格するが、彼女の情熱は写真という別のところにある。

これはLucyの家庭で大きな論争の種となっている。高等教育を修了し、大学の学位取得を目指そうとしている今、Lucyは、自身が芸術家としての魂を持っていることを家族に納得させようとしている。母親も祖母もLucyを美術学校に入れたがらないのは、彼女がいわゆる "本性 "に従うべきであり、女性的な役割に身を捧げ、資本主義的な生産という考えに決して屈してはならないと主張する、3D技術を用いるインフルエンサーの新しい波の影響を受けていると考えているからだ。「そんなに写真が好きなら、物理学を学び、光学を専攻して、光を扱う仕事をしなさい」と祖母は勧めた。彼女の家庭内で緊張が高まったのと同時期、エチオピアで残っていた最後の武力衝突が終結しつつあった。主にアフリカ系離散民とアフリカ連合から寄せられた国際援助と、近隣諸国や武装集団との和平交渉への女性の積極的な関与が功を奏し、約20年間の努力がようやく実を結んだのである。

Lucyはニュースをよく見ている。様々なメディアや3D技術を用いるインフルエンサーがどの写真を選んでいるかを観察し、誰の物語が語られているかを考察するのが好きだ。興味深いことに、誰もが平和の達成を祝うだけで、女の子と女性の物語には焦点を当てていないように思える。彼女はアナログカメラを持って散歩に出かけた。驚くなかれ、彼女は超近代的な3Dカメラが嫌いなのだ。Lucyは頭の中がいっぱいで、いつの間にか、難民再統合キャンプの前で道に迷ってしまうっていた。

これは誰も話題にしない話だ。何千もの家族が、そのほとんどが女性と子どもが、紛争が終わり故郷に戻ってきた。この国は、技術・政治・平和構築でのジェンダー平等の功績を誇っているため、難民の女の子と女性の話は、先進国の物語にはそぐわない。

Lucyは一人で座っている女性が彼女を見つめているのに気づいた。Lucyは本能的にカメラを構え、写真を撮る。何人かの女性が彼女に近づき、何をしているのかと尋ね、彼女は、彼女たちの話を伝えたいと言った。女の子が彼女の古いカメラの絞りを見て、「それは何」と尋ね、Lucyは「光がそこから入るの」と答えた。みんな笑顔になる。

Lucyは何日もキャンプを訪れ、女の子と女性に彼女たちの経験に関する話を聞いた。Lucyは彼女たちに写真の撮り方を教え、カメラをそこに置いていき、彼女たちの日常・苦悩・小さな喜びの瞬間を捉えられるようにした。写真を通し、女の子と女性の難民としての生活が、男性と男の子と比べてどう違うか、彼女たちは明らかにした。もしこの国が社会のあらゆる分野でジェンダー平等を達成しようと本気で考えているのであれば、こうした女の子と女性の集団を実際に優先すべきなのだ。

Lucyは、国内最大級のメディア機関に女の子と女性の写真と証言を持ち込み、彼らはそれらの掲載に同意した。世界中の多くの地域が完全な平和を実現したのはこの約10年間のことであり、紛争後の女の子と女性の物語の多くはまだ語られていないため、この写真資料は世界中に拡散された。政策立案者たちが女性と女の子の社会復帰のためにジェンダーに配慮したリソースの投入を強化し始める一方、Lucyは権威ある写真ジャーナリズム賞を受賞し、母親と祖母はようやくありのままの彼女を見るようになった。

エチオピアに平和が戻り、そして今、Lucyの家にも平和が戻ってきた。



一人たりとも見捨てない
- Ángela (18歳、ペルー)*

注: この物語は性暴力に言及している。物語はすべて架空であり、作者の個人的な体験を反映したものではない。

15歳のAlmaは二度目の目覚ましを止めた。時計は2055年9月4日午前7時30分を指していた。親友のPazとValienteは既に登校中だろうし、間に合うよう走らないといけない。Almaは早起きが大嫌いだが、それ以上に友人との時間が大切だった。彼女は途中で2人に追いつく。PazとValienteは、朝の不機嫌なAlmaの顔をからかう。Almaは2人に憤慨して見せようとするが、笑いをこらえることができない。これは、温かい人びと・完璧な日の出・日没・月夜の夜がある国「インスピラ」での、ありふれた朝の光景である。

放課後、友人と抱擁を交わしたAlmaは、チェスクラブに直行した。「このチェス盤から離れて24時間も経たないのに、もう恋しくなっているなんて信じられない」と、彼女は尊敬するコーチのVictoriaに話した。午後が過ぎるにつれ、Almaは次々とゲームに勝ち、Victoriaの挑戦を破り、自身の記録を更新していく。いつかインスピラで一番のチェス名人になる、と彼女は心の中で誓った。

いつものように、Almaは家に帰って両親に抱きついた。眠る前に、彼女は並外れた自身の成績について書き留めるためにチェス日誌を手に取った。棚から日誌を取り出すと、5歳の時に初優勝したときの写真が床に落ちた。Almaは写真を見て取り乱し、再び本の間に隠そうとした。室温は暖かかったが、Almaは靴下を履いて毛布で足を覆った。

その夜、彼女はほとんど寝れなかった。体は震え、冷たい汗が流れた。混乱した悪夢の中、彼女は幼い自身の声を聞いた。「コーチ、やめてください、お願いです」。そして、男性の声が聞こえた「ああ、なんてことだ、さあ、遊んでいるだけだよ」。Almaは幼い女の子のように泣きながら目を覚まし、彼女の母親は直ぐに彼女の部屋に行き、Almaを抱きしめ、落ち着かせようとした。

朝、目覚まし時計が鳴り、Almaの母がそれを止めた。その日は2人とも家にいなければならなかった。温かい朝食を食べながら、母は「あなたが、あのトラウマに今も悩まされているのね。ごめんなさい。あの部屋に私が一緒にいたなら、あんなことは起きなかったのに」と言った。Almaは涙を浮かべ、彼女のせいではないと答えた。当時、Almaが母親を信頼し、効率的な保護体制が整っていたおかげで、Almaの主張は信用され、真剣に受け止められた。彼女は身体的・精神的医療サービスを受けることができ、コーチは刑務所に入り、スポーツ界から永久追放された。最後のセラピーから5年が経ち、Almaと母親は、この件について再び話すことはなかった。だが、たった1枚の写真が、再び深い傷を開かせてしまったのだ。

照明がつき、観客は立ち上がって熱狂的な拍手を送った。Almaの父と母、そして友人のPazとValienteは、Almaがインスピラ映画祭の最優秀賞を受賞するために登壇すると、涙と笑顔を抑えきれなくなった。司会者はAlmaに、彼女の映画制作の動機について尋ね、彼女はマイクを手にし、こう回答した「これは私だけの物語ではありません。30年前は、5人に1人の女の子が同じようなことを経験し、今も、10人に1人の女の子が経験しているのです。私たちは、性暴力を含むあらゆる形態のGBVの防止と対策に関し、我が国がどれ程進展したかを知っています。しかし、暴力を受けている女の子が1人でもいる限り、私たちは闘い続けます」。



マダム・プレジデント
- Tenneh (23歳、シエラレオネ)

2055年のある晴れた日の午後、シエラレオネ北部のボンバリ地区の小さな村、ビンコロの「ひらめきの木」の下で、Fatimaという聡明で批判的な考えを持つ16歳の女の子が、女性と女の子の問題について熱く語っていた。彼女の手には女性の歴史についての本が握られ、数十人の様々な年齢の女の子が彼女を取り囲み、これまでの女性の権利擁護者の生き方について耳を傾けていた。それらのアドボケイトは、CEFMUの廃止・10代の妊娠の防止・彼女たちのSRHRの向上・彼女たちのすべての教育段階での質の高い教育への完全な享受・女性のリーダーシップのために戦っていた。

シエラレオネでは最近、法律で定められた、議会でのジェンダー平等が達成された。しかし、予測では、女性の大統領の登場には、あと1世紀近くかかるという。彼女たちがこの予測について議論し始めたとき、男の子が数人通りかかり、その会話を耳にした。彼らは、この国は甘すぎる社会になってしまった、と彼女たちをからかい、最高権力者の地位のガラスの天井維持されることを望んでいた。「国のトップは男の仕事だ」と主張した一人は、他の男の子から拍手喝采を浴びた。

彼女たちは、男の子の口からそのような保守的な意見が出てくるとは予想しておらず、Fatimaは怒りのあまり、何を言っていいのかわからなかった。Fatimaは批判に敏感すぎることがあり、その感情は彼女の中に残った。帰宅後、彼女は過去にこのような反発があったか調べることにした。彼女は非常に優れたデジタル機器やオンライン接続を利用できたが、活動家であり元国会議員でもあった敬愛する祖母の匂いのする本棚の古い本を読み漁るのが好きだった。Fatimaがそこの本をパラパラとめくっていると、こんな素敵なメモが見つかった。「私たちは一生懸命戦った。あなたたちの世代はミルクとハチミツのようになるだろう。すべてはあなたたちの手の中にあります。女の子よ、何事にも恐れず挑戦しなさい。あなたならできるわ。愛を込めて、おばあちゃんより」と。

Fatimaの全身の細胞に闘志がみなぎった。祖母をはじめとする多くの女性アドボケイトの足跡に触発され、自身の世代の特権を認めながら彼女は、シエラレオネ人にとって最後のタブーを破るために再び闘う時が来た、と確信した。自国初の女性大統領になること。そして、彼女はそのために100年も待たないだろう。

「ひらめきの木」の下、彼女は女の子に夢を大きく描き、政治的な願望を追求するよう訴え始めた。翌年、Fatimaは今まで通り学業に極めて真剣に打ち込み、大学の政治学コースを受講し、キャンパスのユース女性を重要な政治討論に参加させ、オンラインでコンテンツを発表し始めた。年々、シエラレオネ大学では政治学コースへのユース女性の入学希望者数記録が更新され、あらゆる国内メディアが、ユース女性の指導的地位への関心の顕著な高まりについて報道した。

Fatimaは、男性的な特質は、大統領としての絶対条件であると考える様々な男女の集団の抵抗に直面した後、『彼女の時代は今』という本を執筆した。そこには、シエラレオネの歴史上で、国の発展のために人生を捧げ、多様なスキルや異なるリーダーシップの形を使って様々な分野で指導的役割を果たした、様々な年齢の女の子と女性の歴史が書かれている。同書は一番のベストセラーとなり、読んでないと口にすれば、それはほとんど恥とされるほどだった。反対派の指導者たちでさえ読み始めた。Fatimaの村ビンコロに戻ると、女の子とユース女性が「ひらめきの木」の下に集い、毎晩一緒に読んでいた。

『彼女の時代は今』は同国に永続的な文化変革をもたらし、大部分のシエラレオネ国民は、女性が大統領になる可能性はあると確信するようになった。事実、ある調査で、人口の70%が女性大統領の誕生を期待していることが判明した。何十年もの間、法律や国の公式目標にすでにあったことが、ついに社会的規範として受け入れられるようになったのだ。Fatimaは大学を卒業するやいなや、ビンコロ初の女性市長に2期にわたって選出された。そして今年2072年、33歳で世界最年少の大統領、私たちが親しみを込めて呼ぶところの「マダム・プレジデント」に就任した。



私の医療センター
– G.T. Brielle (18歳、トーゴ)*

12歳のRachelは、トーゴ北部の町ソトウボアにある公立病院で大半の時間を過ごしてきた。風邪・熱・胃腸炎にかかることはあっても、他に病気らしい病気を患ったことは一度もなかった。だが、彼女は2人の医師の娘であり、毎日彼らの職場に通うことをとても楽しんでいた。Rachelの両親はSTIとHIVの専門医で、赤ちゃんから高齢者まであらゆる患者を診ていた。いつも、特に赤ちゃんの患者に配慮し、両親が薬や注射を投与している間、子守唄を歌ってあげるのが大好きだった。ある日、Rachelが病院に着くと、受付のキャビネットの後ろに、彼女と同い年くらいの女の子が怯えて隠れているのに気づいた。

「ねえ、ここでかくれんぼはできないわ」とRachelは注意し、自身を奮い立たせようとした。
「シーッ」と女の子は反応し、Rachelに静かにするように言った。Rachelは彼女に近づき、名前を尋ねた。
「Gnankan」と女の子は小声で言った。「もう行って」。
「どうして」とRachelは迫った。
「ここなら誰も見つけられない!」
「ついて来て、抜け道を知っているわ」。

GnankanはRachelの後を追って職員専用の廊下を通り、魔法にかけられたようにRachelの母親の診察室のドアの前にいた。幸いにも、母の診察枠に空きがあり、Gnankanは直ぐに診察を受けられた。診察後、少し落ち着いた様子で退室したGnankanをRachelが待っていた。どんなにかわいい赤ちゃんでも、この日の午後のRachelの気を引くことはできなかった。二人は同じ秘密の通路を通り、病院から静かで美しい自然公園へと出て行った。

Rachelは、Gnankanの髪を三つ編みにして、財布の中にあったビーズで飾りたいと申し出た。彼女は祖母から、三つ編みは正直な会話への入り口だと教わっていた。Gnankanは、彼女が生まれつきHIVに感染していることを、今まで誰にも話さなかった。父親が母親を捨てたのは、Gnankanが生まれてすぐのことだった。

伝統的な家族内でのスティグマが非常に強く、彼女の母は医療を一度も受けようとせず、不幸にも1週間前に亡くなった。Gnankanは現在、叔母と一緒にソトウボアに住んでいる。

「死にたくない」とGnankanは言った。
「あなたは死なないわ」とRachelは言った。「いつかは私たちと同じように死ぬかも知れないけど。でも、HIVが原因で死ぬことはないわ」。
「どうしてそう言えるの?」
「だって2050年なのよ! 無料の治療はすごく進化しているし、治る人もすごく多い。正直、あなたのお母さんが助けを求めなかったのが理解できないわ」。

GnankanはRachelに、彼女がHIV陽性者の女の子であるために病院や保健センターで耐えなければならなかったことをすべて話した。受付係は、書類の記入のためだけに、皆の前で非常にプライベートな質問を投げかけ、医師は彼女を既婚女性のように扱い、看護師の中には、彼女が一度もセックスをしたことがないのに、「性的に奔放だ」と呼ぶ者もいたという。

「あなたのお母さんに会えてよかった、Rachel。本当にいい人ね」。「ええ。でも、それだけじゃダメなの!あなたにこんな恐ろしいことが起こったということは、他の女の子にもHIVに感染している人、STIにかかっている人、意図せず妊娠してしまった人、あと単純に避妊の選択肢を探している人がいるはずなの。今日、あなたが診察を受けたくなかった理由はよくわかるけど、こんなことはやめなきゃ」。

夜、Rachelは両親にこのことを話した。彼らは優秀で思いやりのある医師で、家に思春期の娘がいるとはいえ、そのニーズ・恐れ・羞恥心のいくつかに驚いた。医学や医療がSRHRの分野で発展してきている事実と同じくらい、思春期の女の子が未だ大人の女性と同様に扱われている事実は明白だった。今こそ彼女たちの体験に耳を傾け、十分に考慮すべきなのだ。

翌日、RachelとGnankanは、女の子の経験について詳細に把握するため、学校と病院で匿名のアンケートを実施した。

秘匿性が保証されたため、何百もの回答が得られ、彼女たちはAIを用いて主要事項をマッピングし、いくつかのシナリオを設計した。最後に彼女たちはCSEの教師に、数回の授業を、各シナリオでの理想的な体験とはどんなものかを詳細に示す「夢の医療センター」の模型みんなで作成することに充ててもらうよう頼んだ。

Rachelの両親の支援を受けて、彼らの模型は病院の管理部門に受け取ってもらった。ジェンダーと思春期の若者に配慮したサービスに関する職員研修・プライバシーと守秘義務に関するプロトコルの改訂・保護者の同意なしに思春期の女の子がサービスを受けられるようにすることなど、いくつかの施策は直ちに実施された。全体的な取り組み方で、思春期の若者の心身の健康に焦点を当てた、総合的な医療・福祉センターの建設に公的資金が充てられた。

2055年の今、このセンターは落成したばかりだ。グループワーク用の部屋は居心地が良く、編み物や素敵な料理を囲んで会話が交わされる。多言語を話す職員で構成された温かく、よく訓練されたチームが、最先端のテクノロジーを駆使し、演劇・ゲーム・歌の形で啓発が展開されている。タブーなく、ただぶらぶらするだけでも、ユースが好んで行く場所となっている。RachelとGnankanは親友になり、来年、二人は大学で医学を学び、将来はどこで働きたいかもはっきりと決めている。

謝辞

本プロジェクトは、Thays Prado (Feminist Futures)の主導で、ワークショップの実施と女の子とユース女性の物語執筆の支援、および本報告書の執筆を行われた。物語は、プラン・インターナショナルの支援を受けた、世界11カ国の15人の思春期の女の子とユース女性により執筆された。

FEMINIST **FUTURES**

イラストは、AI画像生成ソフトウェアMidjourneyを使用し、André Arrudaが作成した。

第一に、ワークショップで私たちと時間と考えを共有し、自身の物語を通じて明るい未来への展望を語ってくれたユースに感謝したい。また、ユースのグループの調整を支援してくれたAnya Gass、そして貴重な意見と支援を提供してくれたSukhbir Thind、Milena D'Atri、Yona Nestel、Johanne Westcott-Simpson、Maria Paula Suarez、Charlotte Stemmer、Awa Faly-Baにも感謝する。

皆が平等になるまで、私たちは止まらない。

PLAN INTERNATIONAL

Until we are all equal

プラン・インターナショナルについて

プラン・インターナショナルは、子どもの権利と女の子の平等を推進する独立した開発・人道団体である。私たちは、すべての子どもの力と可能性を信じているが、それが貧困、暴力、排除、差別によってしばしば抑圧されていることを知っている。そして、その影響を最も受けているのは女の子なのだ。

子ども、ユース、支援者、パートナーとともに、私たちは公正な世界を目指し、女の子や脆弱な子どもが直面する課題の根本原因に取り組んでいる。私たちは、子どもが生まれてから大人になるまで、彼らの権利を支援し、子どもが危機や逆境に備え・対応できるようにする。私たちの広がり、経験、知識を活用し、地域、国、そして世界レベルで実践と政策の変革を推進する。85年以上にわたり、私たちは80ヵ国超ですべての子どもの生活を変えるために、決意ある楽観主義者を結集してきた。

皆が平等になるまで、私たちは止まらない。

Plan International
Global Hub
Dukes Court, Duke Street, Woking,
Surrey GU21 5BH, United Kingdom

Tel: +44 (0) 1483 755155
Fax: +44 (0) 1483 756505
E-mail: info@plan-international.org

plan-international.org
facebook.com/planinternational
twitter.com/planglobal
instagram.com/planinternational
linkedin.com/company/plan-international
youtube.com/user/planinternationaltv